



宮農情報

第45号 平成28年3月3日

「あまおう」3月の管理

南筑後普及指導センター

福岡大城農業協同組合

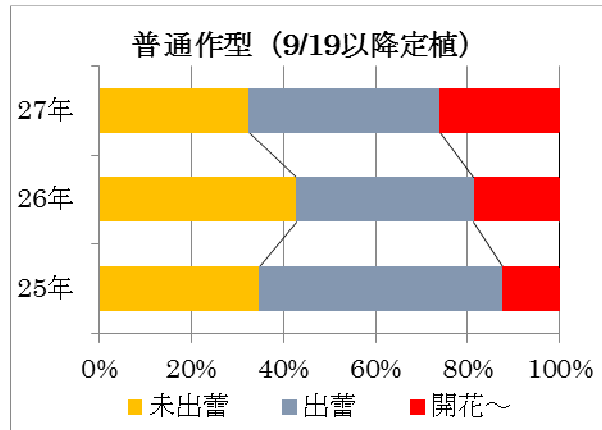
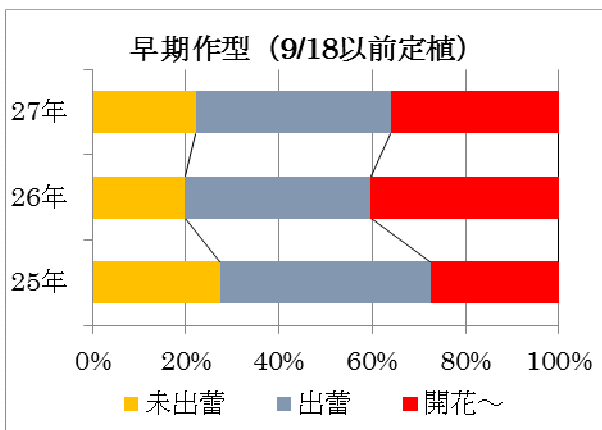
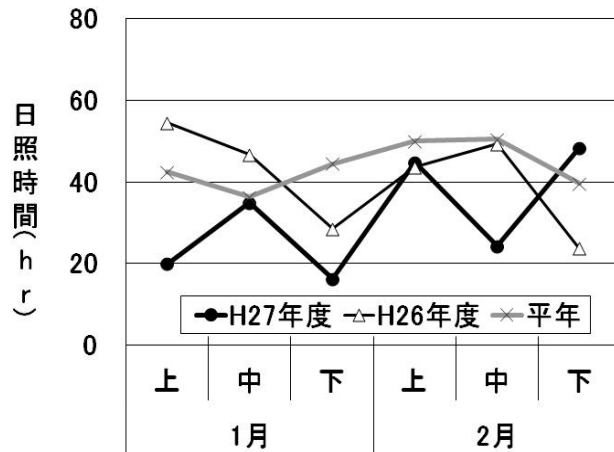
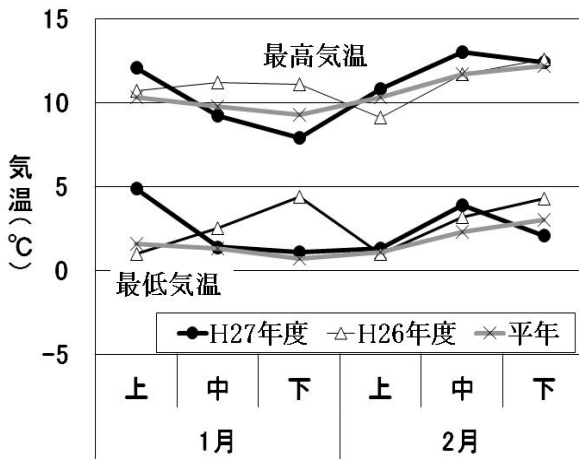
10a 当たり収量 5 t 以上を目指しましょう

1月中下旬の低温や株疲れで心葉が小さくなっているほ場が目立ち、3番果房についても出蕾は早かったものの、その後の生育は鈍い状況でした。しかし、2月になって気温も上昇し、徐々に心葉の伸びは良くなっています。

2番果房については、早期作型で収穫終盤、普通作型で収穫ピークとなっています。3番果房は早期作型で親指大～着色、普通作型で着果～親指大が中心となっていますが、2番果房、3番果房ともに芽の揃いが悪く、特に、普通作型でバラツキが大きくなっています。また、3番果房の芽数が少ないこともあり、3月中下旬の出荷量のピークは例年より小さいと思われます。

病害虫については、ハダニ類、アブラムシ類、灰色かび病、うどんこ病が散見されます。特に、ハダニ類については例年に比べて多発状況が続いていますので、病害虫対策を徹底して下さい。

〈 最高・最低気温と日照時間(アメダス久留米より) 〉



年度別 3番果房出蕾状況(南筑後普及指導センター管内:調査日2月1～5)

《かん水・液肥》

- かん水は、少量で回数を多く行う(目安はpF 値 1.7～1.8 前後)。
- 1回当たりのかん水量が多いと、収穫時の果実傷みの原因となる。
- かん水時期は、果実品質維持のため収穫直後に行う。
- 気温の上昇や株の生育に合わせて、かん水量や回数を増やす。
- 土壌の急激な水分変化は裂果の原因となるので、極端なかん水管理は行わない。
- 液肥は、窒素成分で1～2kg/10a を月に2～4回に分けて施用し、3月末で終了する。

《摘果・果梗の除去・芽の整理》

- 収穫が終了した果梗は、傷果防止と次果房の出蕾促進のため速やかに除去する。
- 芽数は4～5芽を確保し、極端に小さいわき芽は除去する。
- 3番果房以降の着果数は、着果負担や果梗の強さを考慮して3～5果/枝にする。
- 株疲れが見られる場合は、摘果を強めに行う。
- 過繁茂になっている株では、果実にかぶっている葉を除去する。

《温度管理》

- 日中は、サイド・谷・妻面を開放して換気を行い、低めの温度管理を行う。
- 夜温7℃以上が続く場合は、夜間も換気したままにする。

【 3月以降の温度管理の目安 】	
昼間	低めの管理 (午前: 18～20℃ 午後: 18℃以下)
夜間	5℃ (夜温 7℃以上は開放)

《電照管理》

- 草勢を見ながら徐々に電照時間を短くし、3月中下旬を目安に心葉の展開が外葉より高くなりかけたら終了する。
- 電照終了後心葉の伸びが悪くなった場合や、展葉速度が極端に遅くなった場合は電照を再開する(2時間程度)。

《炭酸ガス施用》

- 温度上昇により換気開始時刻が早くなり、炭酸ガス施用効果が小さくなるため、日の出が早まるのに合わせて、施用開始時間を早める。夜間ハウス開放し始める時期(3月中下旬)を目安に、炭酸ガス施用を終了する。

(裏面へ続く)

軟果対策

- 高温期は果実の着色が早いため、収穫遅れによる「過熟果」の発生が多くなるため、集荷場持込8分着色程度のものを収穫する。
- 果実が葉の陰になると黄種の原因になるため、葉除けや玉出しを行う。
- ハウス内温度上昇を抑制するため、白色遮光剤を3月中旬と4月中旬の2回に分けて薄く塗布する。

<塗布剤散布例>

- ・ 資材名：クーラーコート（20L：約30a分）
- ・ 散布方法：10倍程度（クーラーコート7Lに対して水70L/10a当り）に希釈し、動力噴霧器で噴口をはずすか、鉄砲噴口でハウス外面に散布する。
- ・ 注意事項
 - ① 散布前にハウス谷の閉め忘れがないようにする（果実等の汚れ防止）。
 - ② 巻き取り部分にかからないようにする（ビニールの粘着の恐れ）。
 - ③ 散布後は、散布資材（動噴、ホース、タンク）の洗浄を行う。
 - ④ 希釈すると流れやすいため、ハウスが乾いている日中に行う。また、乾燥に時間がかかるため、天気の良い日を選んで作業をする。
 - ⑤ 風がある時は、飛散して周囲の物に付着することがあるので注意する。

《病害虫防除》

◎灰色かび病

- ・ 湿度が高いと発病しやすいため、出来るだけ換気する。
- ・ 発病した葉や果実は速やかにハウス外に持ち出し、定期的に薬剤防除を行う。

◎うどんこ病

- ・ 夜温が上昇し、生育が軟弱徒長気味になると発生が多くなる。
- ・ 軟弱に生育しないように管理し、定期的な予防散布に努める。
- ・ 薬剤散布の際は、葉裏にもしっかりと薬剤がかかるように散布する。

◎スリップス類

- ・ ハウス外からの飛込みが増えるため、発生状況をよく確認する。
- ・ 発生した場合は、ミツバチに影響の少ないIGR剤（幼虫にのみ効果あり）を中心に、薬剤防除を行う。

◎ハダニ類

- ハダニが発生している株は強めに摘葉し、葉かぎした葉はハウス内に放置しない。
- 防除薬剤が葉裏まで付着するよう、薬液量を十分に使用し丁寧に散布する。
- 化学薬剤だけでは防除に限界があるため、気門封鎖剤も併せて利用する。ただし、気門封鎖型薬剤の卵に対する効果はほとんど無いため、気門封鎖型薬剤は複数回(2～3回)5～7日おきに散布を行う。
- 同一系統の薬剤を続けて散布すると耐性の発達が懸念されるので、異なる系統の薬剤をローテーションで使用する。

<同一系統の一例> イチゴ ハダニ類の防除剤

系統名	薬剤名
マクロライド系	コロマイト水和剤(1日)
ピラゾール系	ダニトロンフロアブル(0日)、ピラニカEW(1日)
その他	スターマイトフロアブル(1日)、ダニサラバフロアブル(1日)

()内の数字は、ミツバチへの影響日数

※チリカブリダニを導入しているほ場では、影響日数を確認して、チリカブリダニに影響のない薬剤を選定して散布をして下さい。

《親株の管理》。

- 炭そ病は、株の傷口から感染する機会が多いので、下葉の除去後は防除を必ず行う。
- 炭そ病の防除は、発病前からの定期的な農薬散布を基本とし、手入れの後や降雨の前後も必ず行う。
- 基本的には炭そ病の防除が中心となるが、うどんこ病、ハダニ類も念頭に置いた防除を実施する。
- ランナー発生促進のため、過乾燥とならないように、適宜かん水する。
- 追肥は、心葉の展開始め(3月上中旬)に化成肥料を施用する。化学肥料の量は、親株800株当り窒素成分1～2kgを目安とする。プランターの場合は、IB化成で株当たり5粒程度を目安とする。

農薬の登録使用基準を遵守しましょう！